

とになる。

種子貯蔵庫から取り出した際、ユキモチソウの花弁の縁にやや傷んだ様子が観察されたが、ムサシアブミ、マムシグサの花は非常によい状態であった。

展示は展示温室（温度なりゆき）で行なったが、ユキモチソウは4～5日程度と花持ちが非常に悪く、マムシグサもほぼ同じであったが、ムサシアブミは非常に花持ちが良く約3週間観賞することができた。

考察

低温処理の結果、自然状態より約2か月生育を遅らせ、植え付け後は非常に短期間で生長し、ほとんどの株で開花が揃う点において優れており、ユキモチソウやムサシアブミを夏期に開花させることが可能であることがわかった。ただし今回は、開花が予想以上に早く、展示のほぼ1か月前には開花していた。この対策として、

低温処理期間の延長が考えられるが、芽が伸長してきたにもかかわらず低温処理を続けることは貧弱な株になったり低温障害を招くなど、生育への様々な障害が懸念される。その他の対策として、低温処理温度をより低くすることも有効と思われるので、今後試してみたい。

次に、開花株の低温貯蔵では、ユキモチソウで少々傷みが見られたが、概ねよい状態で維持できた。ムサシアブミにおいては、展示場に移動させてからも長期間開花していたことから、開花株の低温貯蔵は特に必要なかったと考えられる。

今回行なった低温抑制栽培は、ユキモチソウ、マムシグサにおいては開花期間が短いことから、長期間の展示には不適当と思われる、植え付け時期の検討も必要である。また、ムサシアブミにおいては開花期間も長かったことから、非常に有効な手段であることがわかった。

人工湿原水槽におけるサギソウの栽培

和氣由紀子・飯塚 康弘

本園のシンボルマークであるサギソウを常設展示することを目的として、2月上旬、系統進化園の人工湿原水槽にサギソウの植え付けを行った。

植栽方法

既存の水槽は、内寸横190×縦80×深さ80cmのコンクリート製で、下層50cmは径5～15cmの碎石層である。今回は、深さ約20cmまでの表層

部の土を取り除き、ボラ土（微小～大粒）とミズゴケを配合し、マグアンプKを少量加えた用土に入れ替えた。

植え付けは、横24列×縦10列（240株）とした。

生育状況

全体的に生育不良で、枯死株が多く、開花に至ったものは10株ほどであった。この原因として考えられるのは次の2点である。(1)水槽の西側にあるスギ林が日光を遮り、日照不足が生じたこと。(2)排水のしくみがうまく働かず、水が停滞気味であったこと。以上の点については、今後改善の必要がある。



人工湿原水槽



サギソウ植栽の様子